

翻 訳

## 施蛰存『善女人行品』翻訳と解説

齋藤敏康

## 残秋の下弦の月

施 蛰 存

夕陽が屋根の陰に消えていって、小さな中庭には静寂が訪れた。

妻はベッドで眠っている——いや寝ているというよりも依りかかっていると言ったほうが適切かもしれない。妻の病と性癖のゆえに、三個の厚い木綿地の枕を当てている。夫はというと、かれはいつものように小ぶりの書斎机の前に腰をおろして、真珠の光沢を放つ1931年型パーカーを手にとり、机の上に置いた一枚の四百字詰め原稿用紙の二行目三マス目にペン先を着けたままむなしく丸印を書いている。かれは新しい作品のストーリーを構想しているのだが、まさにインスピレーションが湧こうとするその瞬間がきた時に、一秒の猶予もおかず、最初の一文字を書きつけようと待ち構えているのだ。だがそのようにしてすでに三つの午後と夜がすぎていた。

妻は憎むべきあれこれの病にかかっていた。心臓の動悸、胃の消化不良、発熱、片頭痛。ベッドに臥せてからもう六週間から七週間になる。毎日午前中、距離にして五里の所にある中学校で教えるほかは、午後帰宅してから寝るまで——それは当然夜半までということだが、ずっと寝室にあって文章を書きながら妻の伴をしているのだ。

ただこの三日來、かれの思索はいよいよよかき回されて混乱の状態にある。ついにただ一つの思いつきすら浮かんでこない。とりとめもない思いつきに触発されるとすぐにそれをおし広げて一編の小説を書き上げてしまえるストーリー！ そんなに複雑なストーリーではなく、ちょっとしたストーリーにだけ気を配っているに過ぎない小説ですら、今では流行らないのだ。こうして時々刻々かれは脳みそを絞って探し続けるのである。しかし望みはない。思い悩んだ末に力をこめて筆を一振りしても、札をわきまえない一滴のインクが原稿用紙を汚すだけなのだ。そこでまた用紙を一枚かえた後、かれのパーカーは相変わらず第二行の三つ目のマス目の上でむなしく丸印を書いている。

妻はガラス窓の一つ一つの空に目をやりながらやがて眠りにはいった。まるで緊張した感情が突然緩んだかのように、少し寝がえりをうちながら、軽くだが長くため息をついた。

「また夜になったわ」

妻のことは必ずしもかれに向けて語られたものではない。そしてかれもまた妻が何を言っているかなどに関心をよせていない。しかし、この声は室内がすでにまったく暗くなったことをか

れに感じさせた。もう明かりがなければ字を綴ることはできない時間だ。それでかれは筆を置いて積み上げられた紙束の間から卓上電灯のスイッチを探りあてるとテーブルの縁に近い壁に向かって明かりをつけた。それとともにかれは開け放たれたカーテンに目をやり、少し思いにふけていたようだが、やがてまたパーカーの万年筆を手にとった。だがこれでは結局うまくないと気づいたかのように、また筆を置いてあえて起ち上がると窓の前に立ってカーテンを下した。

書斎机の前に戻ろうとすると、妻の微かな声が聞こえた。

「お茶を一杯飲ませて」

それでかれは歩みを変えて、茶たくで一杯の茶を淹れるとベッドの前まで運んだが、やはり黙っていた。茶碗は妻の唇から5、6センチのところにあつたので、かれはそれ以上近づけなかった。

妻も身体を起こそうともせず、布団から手を伸ばして茶碗を手にとろうともせずに、ただいぶかしげにかれを見ている。

「どうしたの？」

「どうしたって？」

「なぜ黙っているの？」

「なにも。君にお茶を淹れただけだよ」

「あなたって、嫌々のように見えるわ」

これは挑発をしているのか。煩わしくて思考が集中しない夫は、病気の妻の疑い深い声を聞くと一層不愉快になるのだった。だがかれは自分が修養を積んだ人間であることを忘れていなかった。ぐっと一口、唾を飲み込むと言った。

「ウン、でもわざわざ語るほどの話はないんだよ」

しかし妻はかれを放さなかった。

「また無理に取り繕っているの？ 病気だけどまだ眼はたしかよ」

かれはもうそれ以上何か言うことはできそうにないと悟った。茶碗をベッドサイドの小卓に置くと、再びかれの原稿用紙のそばに戻った。法廷の記録を仮構しようとして……、かれは脳みそを絞り始めた。

この時ベッドの病人は身を起こし手を伸ばして茶碗を取ろうとはせず、相変わらずブツブツと話し始めるのであった。

「あなたはまったく変わってしまったと思うわ。いま、とても嫌そうに私にお茶を注いでくれた。あなたがどんなに言い繕ったって、そうよ。思い出してみて。以前あなたは私に代わってどんなこともやってくれた。私のために靴下まで穿かせてくれたわ。ある日、私たちがあの大平原を散歩していた時、私のサンダルが泥沼の中にはまってしまった。そういうことがあったわよね。あなたは私のために拾ってくれた。それから私に穿かせてくれて、そして花崗岩の上に私を腰掛けさせてくれなかった？」

かれは計画中の裁判記録について想をめぐらしながら、病人の感傷は禁物だと思っていた。医者に、彼女は過度な感傷には耐えられないからと言いつめられていた。夫は言った。

「そうだ、その通りだ。僕はみな覚えている。それはみんな僕のやったことだ。でも今でも僕は変わらずやることはすべて君のためだ。嫌々なんてことはないよ」

鼻で作った冷笑を含んだ声がベッドから聞こえた。

もう少し立ち入って、この不幸な誤解を釈明しなければいけないと、かれは感じた。

「まだ信じていないの？ 人は話さないといけないような話がなかったり、心で他のことを考えたりして、黙っているんだ。何も無いのに妄想なんてもうやめて、君のお茶を飲みなさい」

こう言ってしまって、かれはこのことはもう終わったと思った。かれは続けて想を練った。裁判記録をどのように書くべきか、かれが賄賂を受け取ったと言うべきか？……仮に公益的なことに関わる案件だとすれば、この某紳士は……おお、つまりどのような公益事例として書くべきなのだろうか？

妻はちょうどお茶を飲みおえて腹部と肋骨をさすっていた。

「私は肺病になったかもしれない。このあたりが何かとても痛むのよ。どうなのかな」

「それは分らない」

「肺病の人ってこの辺が痛いかどうか、あなた知っているでしょう」

「いや、僕は知らないよ」

「どうして。あなたはこういう常識は全くダメ？ 抽斗の中に「肺病須知」があるわ。取り出してちょっと調べてみて下さい。こんな病状があるのかどうか」

夫は妻の方を振り向いて、それから万年筆をおいて妻が差し示す抽斗の中から小ぶりの本を取り出したが、自分では見ずに妻に渡した。

「自分で探しなさい。僕は文章をつくらなければいけない。閑じゃない」

「本当なのよ、あなたが嫌々だというのは。間違えていないでしょ」

かれはもはや妻を相手にしなかった。この公益の事情が決まりさえすれば、間もなく完成する算段でいる。都市の河を開削し、消防隊を創設し、警察を増強して……おお、それだ…その方がもっと適切だ。黙ったままでそんなことを考えていた。その時、ベッドに横になっていた妻は「肺病須知」を受け取って、第1ページを開けただけで布団の隅へ置いてしまい、やはり新しい回想の中へ沈んでいった。

「ああ、私たち以前はいつも公園に遊びに行っていた。そうでしょう。秋だったかしら。公園のあの紅いカエデたちはなんて美しかったのでしょうか……私たちはいつも喜んでそんなふう綺麗な木の葉の下で腰を下ろしていた。ある時は、私たちは落ち葉の上で葉と葉の隙間を字で埋める遊びをしたわ。あなたまだ覚えていて？……そうよ、私たちはよく馬車で出掛けた。馬車に乗るのが私は好きだった。私たちはいつまた馬車で公園に遊びに行くの？」

しかしかれには聞こえていなかった。そこで妻は苛立ったように少し甲高い声をだした。

「ねえ！ 私たちはいつまた馬車で公園に遊びに行くのと聞いているのよ」

かれはまた振り返って、厭わし気に妻を一瞥した。だがすぐに努力を経た抑制によって柔和になり愛情に満ちた夫の声で言った。

「ああ、君の病気がよくなったらね」

「私の病気がよくなってからなの？ 私がいつ治るかなんて誰も分からないじゃない。その時にはもうあんなに楽しい紅葉はなくなっているかも知れないじゃない。そうよ、冬はとても怖い。もし肺病なら、冬にはもう死んでしまうかも……」

妻の妄想に対しては厳しく抑止する必要を、かれは感じた。このような消極的な思想が、医者が言っていたように、妻の病んだ体にははなはだ差し支えるのである。妻は一日、朝から晩まで

ベッドに横たわってあれこれと思い煩っているが、これがかえって容易に病気を重くしているのだ。夫はこの時、悶々としながら因果関係をほとんど転倒させて、妻のこんな妄想がかえって病気を招いたのだと考えていた。

かれは立ち上がると、ベッドの前へと近づいていった。

「そんな考えを誰に教わったのかな。君はしばらく静かに寝て、心を養うことはできないのかい。思いにふけるのを控えれば、病気は早く容易によくなるよ。そうなれば私たちだって馬車で公園へ遊びに行けるんだ。紅葉だってまだ落ちていないよ」

妻はじっと聴いていたが、眼のなかに特異な生彩があらわれた。だがまるでかれの言うことなど聞こえていなかったかのように、再び自己の妄想のうちに沈んでいってしまった。

「私…わたし思うのよ」

「どう思うんだい」

「私…あなたをこのベッドの上に座らせたいと思うわ」

「ええ、此処に座って君のお供をしてはダメなのかい？」

「いいえ、私怖がっているんじゃないわ。あなたは此処に座るべきだと思うのよ」

「でも、ああ、私が文章を書いていることを、君は忘れたわけではないだろう」

「ええ、忘れていないわ。……でも私は先ず少しだけあなたを此処に座らせたいの。以前、私たちは公園でいつもどんな話をしていたか、あなたは私に話せる？」

これはまったくくだらない。夫は怒りを覚えた。そうなのだ、これは確かに抑制しがたい怒りだった。

「そんなこと、振り返る価値があるというのだろうか」

かれはすぐに自分の場所に戻ると、改めてかれの計画を整理した。裁判記録の贈賄行為を描写するためには、まずかれが公益事情の事案においてこのような配慮を欠く行為を行うのかについて片づけなければならない。……しかし、妻はどうしたのだ、ずっと黙ったままだ。病人のことに思いが至ると、かれはやはり振り返ってみずにはいられなかった。

彼女はじっと天井を見ながら、相変わらず黙想していた。何か眼の奥に神秘の樂園でも見ているかのように微笑んでいた。しかし注意して見ると、妻は夢見心地でいるわけではなかった。すぐに頭を少しこちらに向けると、眼の輝きが彼をとらえた。

「私、采采を見ていたのよ」

かれはとっさに恐怖を覚えた。ベッドの傍まで行くと、妻の顔に邪気の気配が浮かんでいるのを凝視した。

「どうした、なんて言ったんだい？」

「なんて言ったって？……私、采采を見たようなの」

「いい加減なことを！ それはデタラメだ！ 君はきっと采采を思いだしていたんだ！」

「それなら、私たちはいつ采采を埋葬するの？」

「君の病気が治ってからだ！」

かれは恐怖と嫌悪、それに懊悩によって語気が思わず乱暴になった。

「ええ」妻は曖昧に応じて、物思いにふけるように天井を見つめながら独り語ちた。

「私たちは采采を綺麗に埋葬してあげなくては。お墓の上には小さな天使が欲しいわ。外国の

子どもたちのお墓の上にある小天使の石像は幾らくらいなのでしょう？」

「そんなことを考えるのはよしなさい！ 然るべき時に考えれば、尋ねればよいことです。今、君は眠らなければいけない。私に面倒をかけないでくれ。今夜中に文章を書き上げてしまわないといけいないんだ。君が自分の病状を気にかけないのは勝手だとしても、私のことまで少しも思いやれないというのかね？」

かれは多くの言葉を費やしてなだめすかしたが、妻にはまったく届いていなかった。妻はただ延々と自分だけの想念を語り続けるのであった。

「ええ、病気がよくなったら、私は自分でやれるわ。采采に美しい墓を作ってあげるわ。白い石を切り出してね。周囲にはたくさんの美しい花を植えるわ。……どんな花を植えたらいいかしら。ええ、薔薇、庚申薔薇、海棠、それと紫羅蘭、みんな外国の花よ。夜になって、月光が采采の墓を照らす。なんて美しいのでしょう。そうだわ、今日はいつでしょう？……9月21日、そうね、月の光がまだ残っているわ。あなたは どうして明々と電灯をつけているの？ ねえ、それを消してよ、そして窓を開けて頂戴。私はしばらく月の光を眺めるわ」

かれには怒りの他に別の感情はなかった。決然と自分の居場所に戻ると、大きな声で叱った。

「眠って欲しい！ そんなことを考えないで！ 私は文章を書かなければならない。今晚書き上げないと、来週の生活に差しさわりが出てくるのだ。怖いことだと思うだろ？」

「でも、ほんのひととき明かりを消してくれたらいいだけよ。少しだけ月光が見たいだけなの。もうすぐ下弦の月が消えるわ。ほんの少しできっと眠るわ。お願い、これくらい差し支えないでしょう！」

夫は静かに立った。明かりを消して、カーテンを開けると、ソファーに腰を下ろした。

残秋の下弦の月が物寂しい小部屋に注ぎ込んできた。

どれほど時間が過ぎただろう。夫はひんやりとしたものを感じた。かれは起き上がって窓を閉め、カーテンを引いて、明かりをつけた。ベッドに近寄ってみると、妻はもう眠っていた。両頬には赤味が差し、まるでまだ月光を受けているかのように、また花崗岩の上で靴下を履き、馬車に乗って公園や采采の美しい墓で遊ぶことを想うかのように、微笑んでいた。

かれは溜息をつきながら、妻の布団を掛けなおした。

## 妻の誕生日

施 蟄 存

一日前の夜、寝ようとするときに突然、明日のことを思い出した。

「恵、明日は君の誕生日だね」僕は妻に言った。

妻はもう婚姻の夜にまとった布団にくるまって寝ていたが、灯火の下でニコッと微笑んだ。

「結婚してから初めての君の誕生日だろう。」私はまた言った。

「そうだけれど、またどうしたの？」

「お祝いをしてはいけないのかい？」

「えっ、お祝い？ あなたどうやって私のお祝いをするの？」

「考えてみるよ……そうだ、僕は君にお気に入りのプレゼントをするよ。そして君は……僕に

美味しい麵を食べさせてくれる」

「そんなこと？ ありきたりね。私はあなたにお酒で寿ぐ支度をして欲しいわ」

「そんな風に君の誕生日を祝うのかい？ できるならやってもいいけれど、うむ……」

「でもあなたは何をプレゼントしてくれるの？」

「明日出かけてみるよ」

夜、僕は夢の中でも何か適当なプレゼント選んで、妻の結婚後初めての誕生日の祝いに添えようと考えていた。

朝起きると、晩春の陽光がガラス窓を通して柔らかく微笑み、僕も微笑んでいる。今日は記念すべき一日だ。妻にとって大切な日だ。妻の生活が一変してから最初の誕生日であり、この日は妻の最も美しい一日だ。今日が過ぎると、来年以降の今日は結婚生活の様々な煩わしさがつきまとい、綺麗な容貌と青春も徐々に僕の情愛の中で犠牲になっていくのだ。

このように考えてきて、今日は大げさな方法で祝うべきではないけれども、しかし、やはり少し彼女の意に添う贈り物をするべきだ、ええっ、どうして今日は日曜日ではないのだ？ なんと悩ましいことだ！ こんなに儉しい生活を送るためにさえ、記念すべきこの一日の大半をオフィスのデスクの傍で消耗しなければならないとは！

ネクタイを結ぶ時、鏡に向かいながら僕はそんなことを黙想し、そして感慨を覚えた。

振り返って見ると、妻はまだ甘い眠りの中にいた。静かな媚を含んだ寝顔の中に、僕は彼女の寂しさを見て取って心が重くなった。これはみんな僕が毎日朝早く出て、夕方になって帰ってくるからだ。でも妻はこんなにゆっくりと起きだしてくる。昼間、私がオフィスで忙しくしているとき、彼女はメイドとこの空っぽの部屋でどんなに憂鬱な生活を送っているだろう。想いを馳せながら、思わず軽い震えを感じた。しかし僕には自分のオフィス通いの生活を否定する勇気も、また能力もない。

ついには、またいつものように、夢を見ているような妻の睫毛に接吻をして家を出ると、朝の風の中でオフィス方面を通る電車を追いかけている。

文書をあちこち回す合間に、青白い巻煙草の煙が立ち上る中で、妻の孤独な生活の影が不意に浮かんでくる。その想念を極力追いやろうとするのだが、しばらくするとそれが徒労であるとわかってしまう。以前は、もし僕たちの生活が困難だからと言って妻にも苦しい経済の手助けをさせるようなことは、僕は絶対に望まないという考えに固執していた。しかし今となっては、たとえ昼間家にいる寂しさを解消するために外に出て何かをすることもまた大変難しい。何もないように見えても、実際には彼女が気にかけるべきたくさんの細々したことがあるのだ。そのほかに、もし別の方法をとるとしたら、例えば女友達を紹介して寂しさを紛らすことも、取りうる方法であるとはいえ、しかし、却って身に沁みる悲しさを加えるのではないだろうか。僕たちの結婚が自由恋愛であることを知らない者は誰もいない。振り返ってみると、はじめのころ、彼女は追求ということにおいてなんと熱心であったことか。現在のように、毎日彼女の送っている生活が、旧制度の支配のもとで、愛情のない夫に嫁いだ女性の生活と同じであるとは、他人には到底信じることはできないだろう。濛々とした紫煙の中で、またもや妻の安らかな容顔が浮かんできた。僕がじっと見つめると彼女はいつも微笑んでいる。人柄も良く、良き妻たるに恥じない人で、苦

しい生活に対しても辛い表情を見せたことはおろか、わずかに眉を顰めることすらない。立派な学問をしたわけではないが、まるで知識人の大家のように、私たちの間の愛情を深く理解している。しかし神よ！ 許し給え。私は彼女の安らかな容顔の内に、ある種の、恨みでもない、軽侮でもない、悲哀でもない、虚ろな失望があることを確信しているのです。

こうしたあれこれの幻想がまといつくために、今日こそは彼女に喜んでもらえる一番大事なものをと思ったのだ。いわば今日は僕の罪滅ぼしの機会であるといっても過言ではない。

仕事をすべて処理してオフィスの門を出るとすでに四時半になっていた。帰宅する人々が激しく行きかう中で、僕はまた何を買うべきかという問題を考えていた。Birthday Crndle が挿されたチョコレート・ケーキを贈ろうか？ 安っぽい！ 実用的じゃない。それなら精巧な「マニキュア」を贈ろうか。何種類か「ハビガン」の化粧品を贈ろうか。考えてみよう。彼女は最近何に憧れているだろう。ああ、ニュー・モードの洋服が欲しいと思っているのでは？……。

無意識のうちに背広のポケットに手を突っ込んで、思わず啞然とした。何日か前に原稿用紙を買うつもりでいた一枚の一元紙幣と数枚の車代の銀貨の他には、はなから僕は金を身に着けていなかったのだ。僕はサラリーによって生活を維持している人間だ。毎月のサラリーを受け取った後はすべて妻に渡して、たまの用のためにちょっとしたお金を持っている以外は、すべての費用は彼女がやりくりしていた。月末になると残額の乏しさを一瞥してはいつも二人で途方に暮れているのだ。

そんなことで、一体どうやって、何を買うというのだ。

たとえ贈り物の値段をできるだけ安く見積もったとしても、この一元札では到底払いきれものではない。僕は茫然と歩道に佇んでいた。

結局、二束の原稿用紙だけを買って帰りの電車に乗った。電車の中で、なんでこんなに鈍臭いのだろうと自分を嘲っていた。それから細かく見積もってみた。妻から十元ほど提供してもらったら、今回の誕生プレゼントは完成させられるだろう。計算すると来月は給料のほかに別口の収入があるので、生活にはそれほど影響はないと思われた。

家に帰り着いたらもう黄昏だった。空の色が変わり、気圧が低くなって息をするのも重いほどだ。妻は厨房でメイドの助けを借りて麵を作っているところだった。僕がリビングに入るのを見て、すぐにやってくると笑顔で言った。

「私はどんなプレゼントを頂けるの？」

「買えなかったよ。お金を持たずに出かけてしまっただけ」

妻はしばらくポカンとしていた。

「あなた、お金を持っていないの？」

「どこから回ってくるんだい？」

僕は意気消沈して言った。小さな庭を振り返ると細かい雨がパラパラ降り始めていた。

「一度帰って君から十元もらって、買ってこようと思ったんだ。出せなくはないだろう？ 来月は今ほど心配はいらないはずだし」

「あなたに渡せる私のプレゼントを買う十元がまだどこにあるというの？ 合わせてもたったの七、八元よ……」

「まだ二十数元あるんじゃないのか？」僕は驚いて尋ねた。

「ええ、二箇月分の電気代と裁縫代を今日払ったわ。残っているのは七、八元だけ。まだ来月まで持たせなければいけないのよ。お米だって今月のうちにまた買わなければいけないわ。だから今日の麺だってこれで夕ご飯の代わりよ……」

僕はポカンとなった。煩わしい悩みがひとつになって僕を襲った。僕は妻の前に立ち尽くしていた。慙愧を感じ、また彼女を想って悲哀を感じた。妻に何と言ったらいいのだろう。今日もやはり彼女を喜ばすことができなかつたところか、徒に失望させてしまった。僕は彼女を騙していたのかもしれない。ああ、誕生日に添えて花束の一つも買って帰れないくせに、何か他のプレゼントを言い出すとは。

「何をボツと立っているの。私は別にあなたに何か贈り物なんて求めていないわ。ちっぽけな誕生日なんてまさか一大事でもないでしょう。麺を食べるだけでは私の誕生日にはならないの？」

妻はこんな風に穏やかに言葉を継いだ。少しの失望の素振りも見せなかった。相変わらず微笑んでいた。

気鬱な春雨がすっかり暗くなった空からシトシト降っていた。灯の前で、僕と妻は対座して、夕餉の代わりの妻の祝麺を食べていた。妻はいつもの夕食と同じように穏やかに一口一口咀嚼し、スープを啜っていた。そして僕は、彼女が作った細く白い麺ではあったが、どうしても美味しく味わうことができなかつた。ただ、盛り付けた麵丼ぶりの側面を高く持ちあげ、丼ぶりの縁で目を遮って、涙に溢れた両目を彼女に見られないようにしていた。

結婚後の私の妻の最初の誕生日はこうして気鬱な雨音の中で過ぎて行った。



## 施蛰存『善女人品行』解説

『善女人品行』は1933年11月20日、上海良友圖書会社の「良友文學叢書」第1輯第9種として出版された。翻訳底本としては上海書店印行「中国現代文学史参考資料」に収められている1936年4月20日付再販本を使用した。編集者である趙家璧の求めに応じて1930年1月から33年11月までの間に書いた12篇の、専ら「女性の心理及び行為を研究した小説」を集めたと施蛰存は述べている。施蛰存(1904-2001)は1932年から33年にかけて『將軍底頭』(32.1)、『上元灯』(32.10)、『梅雨之夕』(33.3)と短編小説集三集を上梓しており、これに36年9月刊『小珍集』を加えれば、30年代前半までの施蛰存の小説はほぼ網羅された形になる。その中で『善女人品行』の特徴は、書名の通り、同時代のさまざまな女性像が造形されていることであろう。

「本書の各編に描かれている女性は、ほとんどすべて私が近年来眼にしてきた典型であると言つてよい。異なつた季節、異なつた筆調の下にはあるが、それらを私の女性習作画とする」(『善女人品行』序)

と、施蛰存は述べている。このように、早いものは30年1月、最後の小説は33年11月に書き下ろしているように、ほぼ4年間にわたつて書き継がれた作品集として「方法」も「調子」も異なるが、作者の眼は一貫して生活する女性の日常に注がれている。しかも、その冷静な観察態度によって、女性の意識や情緒の微妙な移ろいを精確に捉え得ており、リアリティのある内面世界を作りだしていると言えよう。

所収する作品は「序」に続いて、目次に従つて以下の通りである。「獅子座流星」「霧」「港内小景」「残秋の下弦月」「蓴羹」「妻之生辰」「春陽」「蝴蝶夫人」「雄鷄」「阿秀」「特呂姑娘」「散步」。そのうち「獅子座流星」と「春陽」は「梅雨之夕」や「巴黎大劇院」「魔道」などのフロイディズムや日本新感覚派の影響を受けた作品群の流れに位置づけられて論じられることがあり、施蛰存の代表作とも目されて比較的名で邦訳も存在する。また「阿秀」はプロレタリア文学を試みた作品の一つとして、同時代には言及されることもあった。その他の作品は1980年代における「流派文学」としてのモダニズム文学再評価の時代にあつてもそれほど頻繁に批評の対象になることはなかつたと言える。

しかし施蛰存の女性を描いた「習作画」で注目されるのは、心理主義的な方法を駆使して「内面的リアリティ」の表現を実現し、短編小説の構成を掌握した上に、蘇雪林(1896-1999)が「色合いの瑞々しさ」(色澤的腴潤)と評したような細やかな描写と優美な詞藻が醸す洗練された知性の存在である。そうした『善女人品行』の諸作を作者の思考や情意に沿つて読み、解釈を求めた時に得られる発見のひとつは、それらが、女性たちの社会的現実と向き合う姿勢に寄り添いつつも、彼女らのあえかな憧憬を無に帰してしまうような淀んだ空気の内面、直截に言えば、都市のモダンな景物の裏に潜みながら、都会人の内面に深く影を落とす前近代的、封建的な思考の核心を見据えていることである。現代の批評家であるレイ・チョウ(周蕾)は、中国は近代文学においても「母なるものの理想化」と「伝統的な道徳的態度の再構築」が胚胎する(『女性と中国のモダニティ』2003年)と述べるが、『善女人品行』と題して、あえて女性の習作画を編んだ作家の文

学的モチーフにも同質の視点を見ることができるであろう。

書名の『善女人行品』はどのようなイメージを喚起するだろうか。善女人、善き女性とは単に美人、善人ということではない。普通の小市民、体制の価値に従順な真面目な女性という意味はある。健気に生活や人生を考え、人間として真っ当に生きようと心掛けている女性という意味合いも加わるだろう。出自や社会的地位には関わらないが、しかし集中の各篇の主人公を見ると比較的育ちの良い、一定の素養を備えた中産階級の女性というニュアンスも強い。つまり都会的な教養と礼儀作法をわきまえた、一見新しいタイプの女性が、これまた一見すれば近代的で華やかな都市において、囚われている多くの封建的な桎梏、結婚や社会的自立などについての既成の尤もらしい観念に対して、一皮めくったところにある重苦しい真実を、女性たちの生活と真理を通して明らかにするところに施蛰存の意図があったであろう。

「行品」もあまり頻用される言葉ではなさそうである。行い、行為という意味は勿論ある。その意味では品行と言い換えてもさして構わないように思う。しかし、ここでは女性の暮らしのありようを理屈ではなく、形象を通じて示す、姿として表現するという意味が込められている。事に臨んで女性がどう感じ、考え、行動するのか。その感情、行為のかたちと、そこに巧まらずして表れる性格や品性、それが行品であるだろう。

1930年代には左聯（左翼作家聯盟）の作家たちが、一般商業誌を含めた各種の雑誌で進歩的思想を広める一方で、ユーモアや機知に富んだ「小品文」といったライトな読物も流行していた。アメリカ文化の浸透と大衆的な娯楽としての映画の隆盛、それと文学との連動など新しいメディアの普及も見られる。

民国期に入って女子教育も急速に拡大し、中学や女学校、あるいは大学教育を経た女性が一定の社会層を形成して、女学生文化が時代の流行になった。そうした中で「新女性」という言葉に象徴されるような、近代的な都市中産階級の女性の活躍や挫折を描く映画や小説が登場し、時代はフェミニズムの様相を呈していたともいえる。『善女人行品』もまたそうした空気に沿うものであったであろう。しかし、30年代のフェミニズムには、生活の隅々にまで浸透した儒教的道徳規範と相変わらずの迷信に基づく愚昧、牢固な思考様式や行動様式が厚い壁として存在していた。そして施蛰存は、一連の女性たちのささやかな憧憬と喪失を描くことによって、そうした時代の様相を冷静に見つめている。ここに訳出した「残秋の下弦月」「妻之生辰」の二篇もそのように位置付けられる小説である。

#### 「残秋の下弦月」について

冒頭の原文である。

夕陽從屋脊上消隱下去，小小的庭院中歸於寂靜了。

物語は全体の情調を暗示するこの印象的な文章から始まる。「消隱」は夕陽に対して使われると強い喪失の感じ、幽暗の気配の訪れを想像させる。「歸於」には、一途にそこに集中し帰着するような語感があって、一文は全体として、静寂が小さな庭に濃く深く漂うさまを彷彿とさせる。

物語は、病床に伏せる妻と、その妻を看病しつつ小説の筆を執る夫とのささやかな交渉が、二人を結ぶ紐帯の喪失と幽暗の気配のうちに淡々と描き出される。夫は今、小説における裁判所の

記録を仮構しようと焦慮している。妻はそこへ夫との過去の思いで話を挟み込んで彼の思考を中断させる。

病床と書斎の間で交わされる夫婦の会話はどこまでも別々の思いに引き裂かれていて、共通の意思や目的に向けて共鳴し合うような関係にはない。弾性を失って萎えてしまった感情、緊張の糸が切れたような心理的遣り取りのうちには、惰性と倦怠があるだけ。施蛰存はそうした夫婦の心理的關係を、おそらく彼がジュリアン・グリーンなどを読むことによって得たところのアンニエウな情調として描きたかったのかも知れない。

しかしこのように夫婦の感情が冷えている原因は、実は采采という子が死亡し、そのことから二人の間に、とくに妻に精神的な落胆と喪失感のあることが結末近くなって突然明らかにされる。

気弱な妻は生活への意欲を失っている。不幸な采采を憐れみ、現実には満たされない幸せの代償を空想に求め、逃避し、諦めと死への憧れをさえ示す。今や死は、妻にとって心地よい思い出のうちに采采と一体になる方途である。しかし夫にとっては、このように落魄した妻は何とも重荷なのだ。彼の焦燥は単に妻や仕事のためだけではなく、采采の死による重い悲しみが意識の底に伏在していることの現れでもある。ただ彼はやはり、病気の妻のために、あるいは生きるための日常に心を砕かざるを得ない。いつまでも過去に恋々として傷ついている妻は、夫にとってもどかしく、腹立たしくもあるのだが、勿論それはやや硬直化してしまったとはいえ、妻に対するいとおしさの感情の形を変えた流露でもある。こうして、寝入った妻の掛け布団を直しながら漏らす夫の嘆息には悲しさとやりきれなさがない混ぜになっており、小市民の日常的な感情としてごく実感的である。

#### 「妻之生辰」について

「もしも私にできる事なら、私は私の悔恨と悲哀を、書いてみたい。子君のために、また自分のために。」とは、魯迅の「傷逝」における夫・涓生の言葉である。「妻之生辰」は「傷逝」とテーマを共有しつつ、それを極めて日常的なレベルに散文化して見せた掌中小説であるといえようか。この短い作品が提示している状況は、どこか切々たる憂愁をもって迫ってくるところがある。妻を顧み、いたわる「僕」の思念が誠実この上なく、またそれを受けとめる妻の姿勢も諦念を滲ませたやさしさに彩られていることによって哀愁の味は深められていると言えよう。

「僕」は妻の、結婚して最初の誕生日に、ささやかな贈物をすることによって、うだつの上からぬ己の事務仕事の犠牲になっている妻をいくばくか慰めようとする。その日、妻は家で麵を作って待ち、「僕」は何か贈物を買って帰る手筈になっていたのだが、どうした事かお金を忘れてしまい、結局何も買わずに帰宅する。もともと安月給の勤め人であってみれば、贈物を買うための蓄えなど家にも残っていないことは、実は妻が一番よく知っていたのだ。

だが夜「僕」は夢を見る。そして朝、「晩春の陽光がガラス窓を通して柔らかく微笑み、僕も微笑んでいる。今日は記念すべき日だ。妻にとって大切な日だ」弾むような心持が「晩春の陽光」に仮託されるが、それは計画が惨めに潰えた後の「瀟瀟たる」「秋悶の春雨」と対蹠をなす、そこへの伏線でもある。そして、その後が続いて陳べられる「僕」の妻に対するいたわりの独白が、いかにも痛切でいじらしい。

妻が朝起きるのが遅いのは怠惰だからではなく、生きがいを失って精神に張りがなくなってい

るせいだ。彼女は夫の仕事を支える妻として、社会生活から切り離されて「寂寞」や「陰鬱」を感じている。「僕」はそのことを慙愧するが、しかし、今の生活を変える勇気や能力を持つにはいたらない、というのである。妻を家庭に置くという形で束縛し、その社会的自立を妨げているという自覚が「僕」にはあり、そうした仕組みになっている世の中に矛盾も感じるが、個としてはまったく無力であって、如何ともなし難い。都市小市民をめぐるそのような問題の在りかを施蛰存が正確にみつめていることは重要である。

今少し「僕」の懺悔に耳を傾けてみよう。

「僕たちの結婚が、自由恋愛であることを知らないものは誰もいない。振り返ってみると、はじめのころ、彼女は追及ということにおいてなんと熱心であったことか。現在のように、毎日彼女の送っている生活が、旧制度の支配のもとで、愛情のない夫に嫁いだ女性の生活と同じであるとは、他人には到底信じることはできないだろう」

要するにここで描かれているのは、知識青年の自由恋愛の破綻のかたちである。自由な結婚によっても、女性の側の「孤独」「寂寞」「凄切」は解消されない。夫もまた自由とは言えない。「傷逝」で子君の夫は、こうした生活に妻を組み敷き、犠牲にすることの残酷さを知悉するがゆえに、またエゴイズムと自己本位の論理の正当性を貫くために、子君と別れ、別の予想された形で彼女を犠牲にした。それは、夫の側からは哲学的で意志的な自己否定であり、自己肯定である。子君は己の回生を志向する夫の激しい毅力の犠牲となった。凄絶な自由恋愛の破綻と言える。

しかし、「妻之生辰」では、夫はそのような毅さを持たない。誠実に悩みはするが、現実を変えることにおいてはほとんど無力である。妻もまた結婚において夢見た「追求」に敗れ、すでに生活は「恨みでもなく、軽侮でもなく、悲哀でもなく、一種の虚ろな失望」といったものに転化している。しかし夫に対しては「辛い表情」を見せることもなく「穏やかさ」を装って耐えている。従容とした諦念のうちに自己の憧憬を沈めてしまっている。

かくして「傷逝」におけるようなカタストローフは出現しない。しかし日常という視座に立てば、カタストローフの危機を内包しながら、そこには至らない夫婦像の方がむしろ常態なのであろう。施蛰存は平凡な夫婦の出口の見えない苦悩と、それを強いる現実社会のある種の圧力といったものを、決して劇的な方法によってではなく、そのまなかいに捉えていたと言えよう。